

# 20世紀精神史

## 第1部 大衆の登場

## ポピュラー音楽

橋爪 大三郎

世界的なビッグヒットが続々生まれ、世界中のティーンエイジャーが同一のアルバムに熱狂する。そんな現象が、ビートルズで当たり前になってきた。革命的な変化だった。

一九六二年のデビューから一九七〇年の解散まで、六〇年代に君臨した英国の四人組バンド、ビートルズは、ポピュラー音楽の歴史を塗り替えた。そしてポピュラー音楽を、大衆文化の主役の座に押し上げた。

### ●学生に共通の感覚

クラシックでもなく、伝統音楽、民族音楽でもない。流行りの曲として人びとの間に生まれ、ひと時親しまれたあと、やがて忘れ去られていく。大昔からポピュラー音楽は、そうしたものだった。

それが二〇世紀になると、ラジオやレコードなど新しいメディアの登場により、流行がますます大規模になっていった。メディアは、何億という人びとに同じ音楽を聴かせ、時代の共通体験を作りだす。美術や文学にくらべて複製が簡単で値段の安い音楽の流行が、大衆文化の先頭を走ったのは当然だ。

それでも戦前、メディアを通じた音楽はまだ弱体だった。ラジオは音質が悪く、レコードは高価だった。いい音を聴きたければ、バンドの生演奏しかなかった。だからイタリア人はカンツォーネ、フランス人はシャンソン、アメリカの黒人はブルースを口ずさむといった、民族、階層ごとの色分けが健在だった。

戦後、録音テープや45回転レコード(ドーナツ盤)が登場して、シングルボックスやラジオのヒットパレード、テレビの音楽番組が流行音楽

ビートルズ 英リバプール生まれの4人のロックグループ。ジョン・レノン(1940~80)が作ったアマチュアのグループにポール・マッカートニー(42~)、ジョージ・ハリスン(43~)が加わり、62年リンゴ・スター(40~)の参加でメンバーが確定。デビュー後、大衆的ヒーローとして世界中の若者を魅了した。67年設立した会社「アップル」の不振などでチームワークが次第に乱れ、70年解散した。

鄧麗君(テレサ・テン=1953~95) 台湾の人気歌手から74年日本デビュー。米国留学を経て、東南アジアで幅広く人気を集め、84年再来日。「空港」「時の流れに身をまかせ」などをヒットさせた。

崔健(1961~) 北京出身。音楽家の家に育ち、トランペット奏者の傍ら、84年にロックバンドを結成。中国の若者にカリスマ的な人気をもつ。

# 反抗と消費文化の落とし子

の主流になっていく。空輸されたドーナツ盤がラジオから流れ、数週間遅れで日本でもアメリカのヒットチャートを追えるようになった。こうして加速した、最新流行に迫ろうとする渴望のエネルギが、六〇年代に爆発する。

六〇年代をまず特徴づけるのは、世界同時多発的な学生叛乱である。日本では全共闘が猛威を振るい、アメリカではベトナム反戦運動、欧州では学生叛乱の嵐が吹き荒れた。中国文化大革命の紅衛兵を、これに加えてもよいかもしれない。

これは冷戦と、テレビと、高度経済成長の副産物である。

長引く冷戦で、米ソに対する抑圧感、不信感が拡がった。正面の敵と激突できないのなら、無理でも自国の政府や大学に抗議するしかない。



日本武道館で開かれたビートルズの来日公演。ワンステージ11曲の演奏会が3日間で計5回行われたが、肝心の歌はファンの歓声でほとんど聞こえなかった=1966年6月30日の最初の演奏会

ズを結成。まず地元で人気に火がついたあと、自作曲「ラブ・ミー・ドゥ」で幸運なレコードデビューを飾る。空前絶後のビートルズ・ブームの幕開けである。

レノン・マッカートニーのヒット曲の数は、単純なロックンロールのコード進行や曲想をはみ出しており、もっと自由な音楽表現であるロックへの道を開いた。主演映画『ビートルズがやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!』は、今日のプロモーション・ビデオの原型だ。彼らの行く先々を十代の少女たちが追いかけた。髪形や服装、演奏スタイルを皆がこぞって真似し、新しいファッションとして定着した。モノラルステレオレックトラック↓フルトラック多重録音という最新技術を、まっ先に取り入れたのも彼らだった。自作自演のシンガー・ソングライターは、ビ

急速に変貌しつつある世界に追いつけない、旧態依然たる体制を、学生は法や思想によらない直接行動で攻撃する。それが同時代に直結するという感覚をメディアが増幅し、同時多発的な叛乱を誘発した。

学生たちの共通項は、言葉でなく感覚だった。それは、シーンズやコリーヤロック、つまり、世界に拡大するアメリカ消費文化にほかならない。ビートルズの爆発的流行は、学生叛乱と同根なのだ。

急変した。世界に追いつけない、旧態依然たる体制を、学生は法や思想によらない直接行動で攻撃する。それが同時代に直結するという感覚をメディアが増幅し、同時多発的な叛乱を誘発した。

学生たちの共通項は、言葉でなく感覚だった。それは、シーンズやコリーヤロック、つまり、世界に拡大するアメリカ消費文化にほかならない。ビートルズの爆発的流行は、学生叛乱と同根なのだ。

### ●開拓者ビートルズ

港町リバプールは、ブルースなどの黒人音楽も流れる場所だった。労働者の家庭に育った高校のバンド仲間、ジョン・レノンとポール・マッカートニーは、ジョージ・ハリスンとリンゴ・スターを加えてビートル

や体制の違いを越えて、人びとを共通の感情に結びつける力がある。そんなもうひとつの例を、鄧麗君(テレサ・テン)にみる事ができる。

### ●ロックは中国へ?

一九七九年に改革開放が始まるまでの中国大陸では、ポピュラー音楽は腐敗した資本主義文明の象徴、禁止も同然の扱いだった。恋愛や異国への憧れなど人間らしい感情は、ぜいたく品だった。そんな渴望切った人びとの心に、台湾で生まれ育った鄧麗君の語りかけるような歌声がしみ通っていく。テレサの父親は、大陸から台湾に渡った国民党員。彼女の恋の歌は、兩岸に分かれ世界に散らばった中国系の人びとの、交流のネットワーク(華人経済圏)形成をうながすものだと考えた。

テレサに感服するのと同じように、中国に偉大なロック・アーティストが現れた。崔健(ツイジン)である。

崔健は、中国初のシンガー・ソングライター。八〇年代半ばに、中国伝統の旋律を力強いビートに乗せた「一無所有(俺には何もない)」で衝撃的に登場、若者の圧倒的な支持を与えた。天安門事件の学生たちが彼の曲を愛唱したせいか、当局はロックを警戒し、演奏会も満足に開けない。いろいろ苦勞しながらも、彼は中国の現実を立ち向かう気骨のある姿勢を貫いている。

先進国のロックは、商業主義にのみ込まれ、反抗も単なるポーズにすぎない。コンサートも管理されて儀式と化し、ロックは伝えるべきメッセージを失ってしまった。そんな困難な状況のなか、本物のロックがまだ可能と思えるのが中国なのだ。

いっぽう日本は、アメリカにつぐ世界第二の音楽市場に成長した。カラオケとウォークマンを発明し、ポピュラー音楽は若者の日常と不可分に溶けあっている。歌謡曲は解体、演歌は衰退し、世界中の音楽を器用に真似た国産のポップスが街にあふれている。

残念なのは、こうした日本のポピュラー音楽で、世界で聴かれるものが少ないこと。これは、日本の若者が内閉し虚弱になっていること何か関係があるかもしれない。消費社会というわたしたちの新たな閉塞とマンネリをつき破る、パワーのある才能がそろそろ登場してもよいころだ。(はしづめ・だいさぶろう=東京工業大学教授・社会学)

ポピュラー音楽は、空間の隔たり

\*毎週月曜に掲載